

2 世界で活動することで見えてきたもの



現在、数多くのNGOや市民団体が、森林づくり活動による国際協力を行っている。ここでは3つの団体に、その活動内容とともに、市民団体として果たすべき役割の考え方や、そこから見えてきた課題について紹介していただいた。

「子供の森」計画を通じた自立支援

公益財団法人 オイスカ

子供を巻き込むことで植林の理解を広げる

「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指す国際NGOであるオイスカが森林を含めた環境保全活動に取り組み始めたのは、1970年代後半からである。

「1960年代から世界各国で、地域に根付いた形での農業支援をしてきましたが、1960年代後半から70年代にかけて、土砂崩れで農地が減少し、井戸水が涸れるといった報告が各地から出てくる

現地のコーディネーターによるプロジェクトという形式

基本的に「子供の森」計画は、現地のコーディネーターが活動を進める形を採っており、資金面も含めて現地で行うことはなるべく現地で行ってもらおう。そのコーディネーターの大半はオイスカで農業研修を受けた研修生である。例えば昨年度、ホンジュラスで新しく始まった「子供の森」計画は、日本国内でオイスカの農業研修を受けていた時に「子供の森」計画を知ったホンジュラスの若者が、「帰国したら自分の村でも緑を増やしたい」と意欲を持ったことから始まっている。「実際にどういう森を必要としているのかは土地の人じゃないと分からないですし、伝統文化や暮らしのスタイルもあります。私たちはそれを重視したいと思っています。ホンジュラスの例も、彼が地元学校に、その土地の言葉で話してくれたからこそ、しっかりと理解してもらえたのです。私たちはなかなかホンジュラスまでは行けないので、彼とはメールベースのやりとりの中でアドバイスをを行い、資金的に

ようになりまし。その原因を探ると、森林が減少していることに行き当たったのです。私たちの活動の発端は各地の人々の生活、ふるさとを守りたいということであり、そのためには農業支援だけではなく環境保全も必要ということ、森林保全に取り組み始めたのです」と言うのは、オイスカ国際協力部の高田絵美さん。

オイスカの森林に関わる海外協力の中でもシンボリックな活動となっているのが、1991年から始まった「子供の森」計画である。この活動は、子供たち自身が自ら学校の敷地や隣接地に苗木を植え、育て

ることで、「自然を愛する心」「緑を大切にする気持ち」を養いながら地球の緑化を進めていこうというものだ。2012年3月末現在、29の国・地域の4534の学校が参加しており、累計植林面積は約4000haとなっている。「1980年代から植林活動を始めていましたが、明日の生活を心配している大人に、木を植えて育てることを理解してもらおうのに苦戦していました。ならば子供を巻き込んでいこうと、『子供の森」計画が始まったのです。さすがに子供が大切に育てた木を伐る大人は少ないですし、自分が経験し考えたことを子供の言葉で親に伝えてくれることが、大人の理解のきっかけになる、ということもねらいとしてあります」と高田さん。

また「子供の力を入れ始めているところだという。『学校単位では、自立すること』『子供の森』計画から卒業したところはいくつもあります。いずれは各国のコーディネーターが自国内に働きかけることによって、国単位で自立できるようにもなってもらえればと考えています。私たち側も、例えばインドネシアやフィリピンでは、省庁と協力関係を結ぶことで教育プログラムとして展開してもらうなど、『子供の森』計画のステータスを上げていく努力をしていますので、そういったものも上手く活用して欲しいですね。私たちも限られた資金の中で、もって『子供の森』計画を必要としている国にシフトしていく必要もありますから」と高田さん。



ホンジュラスでの子供の森計画

は、苗木は自分たちでなんとかするけれど環境教育教材のプリント費が出せない、ということでしたので、その部分の援助を行いました」一方、某国政府から支援要請が来たが、継続的に関わってもらえるコーディネーターを立ててもらえなかったために話が止まったこともあるという。そういう意味でもコーディネーターの養成が今後の課題でもあり、例えばカンボジアのコーディネーターに隣国のタイに研修に行ってもらったりといった、各国のコーディネーター同士の交流にも

森」計画では木を植えるだけでなく、草木染めや木製品、ツル製品など、森の恵みを活用するための教育も併せて行うことで、森林を持続的に活用することによる自立支援にもつなげている。「例えばタイの学校は、森づくりと一緒に有機農業を採り入れ、野菜を売ったお金を新たな植林に回すというサイクルができています。『子供の森』計画では、このような自立の形をそれぞれの学校でつくっていくことを目指しています」



森で堆肥用の落ち葉を集める子供たち(フィリピン)

スリン県は、20年以上に渡って毎年植林ボランティアが派遣されてきた、その第1回目の植林が行われた日を「ラブグリーンデー」として、県民がみんなで木を植える日に制定している。「このように日本人が行動を見せ、また地域の人と触れあうことによって守られる緑もあります。同じように『子供の森』計画も、もともと日本人と地域の人々との交流の場にしていければと考えています」

ローカルレベルでのつながりが市民の役割

またオイスカは1979年からタイのスリン県で、日本からのボランティアを募って植林を行う形の植林支援を行っており、「日本人がわざわざ来て植えてくれた木だから」と現地の人々に大事にされ、立派な森に育っているそうだ。さらに

「国や制度による協力だと、どうしても平等性が求められますが、市民はピンポイントで活動できる立場にあると思います。つながりをつくりながら、それぞれが考える必要なことを行動に起こしていくのが、市民の役割ではないでしょうか。それらが束になることで、面的な活動へと広がっていくことができるでしょう」